日本医史学雑誌 1943；1315:217-219

藤浪博士追悼

故藤浪剛一先生略歴及び病歴

大鳥蘭三郎

略歴

明治十三年六月七日、名古屋市久屋町百五十九番戸に誕生。七歳にして同地の小學校に入り、後愛知一中に進み、中途にして東京に出で獨逸協會中學に轉ず。同校卒業後、岡山醫學專門學校に入學、明治三十九年同校を卒へ、引續き同校病理學教室に入り、病理學を修む。同四十年東京帝國大學醫學部皮膚科介補となり、土肥慶藏教授に師事す。幾もなく同年傳染病研究所技手に轉ず。明治四十二年歐洲に渡り、墺國ウィーン大學に於てホルツクネヒト教授の許にて「レントゲン」學を專攻し、居ること四年にして同四十五年歸朝す。直ちに順天堂醫院に勤務し、「レントゲン」科長たり。大正四年二月、主論文「空虚なる胃中に於て液分泌を診定する簡易なる「レントゲン」檢査法に就て」外參考論文六篇を東京帝國大學醫學部に提出して醫學博士を授與せらる。大正九月慶應義塾大學病院開設せらるや同年七月十六日付を以て同大學醫學部教授に就任、理學的診療科教室を主宰す。同十年再び歐洲に遊び、翌年歸朝す。爾來逝去に至る迄滿二十一年勤續、その職に在り。「レントゲン」學、光線醫學、温泉醫學の研究、指導に從ふ。同十二年、日本「レントゲン」學會設立に際してはその創立者の一人として參劃し、同會幹事たり。昭和三年日本醫史學會創立されるや、同會理事に選任され、昭和五年日本温泉協會設立、同會理事に選ばる。昭和八年四月、日本放射線醫學會設立、同會第一回會長に推さる。昭和十二年四月、

Österreichische Gesellschaft für Röntgenkunde und Strahlenforschung の名譽會員に推薦さる。昭和十年日本溫泉氣候學會設立と共に同會理事に選任され、同十五年十一月富士川游博士逝去されるや推されてその後を襲ひ、日本醫史學會理事長となる。同十六年日本溫泉科學會起され、同會副會長に推さる。昭和十七年十一月二十九日病を以て逝去さる。享年六十三歲。

病歷

先生は平素極めて健康であられ、既往にも輕微なる扁桃炎、輕度の蛋白尿ありたるのみなりしに昭和十六年二月七日夜、就寢後間もなく狹心症樣發作突如として來襲し、胸內苦悶を訴へられ、呼吸短促、泡沫樣血痰あり、轉展反側さる。附近の醫師の手當により右發作は漸く靜まる。同年八月九日午後慶應病院にて拔齒手術を受けられたる後に再び發作起り、大森教授の治療により間もなく鎭靜す。かくの如き有樣なるにより十分なる御靜養を願ひしも暫くの休養を攝られしのみにて引續き勤務し居られたり。然るに同年十一月三十日夜又もや激烈なる發作來り、同十二月十九日、越えて昭和十七年一月十五日と第四回、第五回發作ありたる爲、大森教授のすゝめにより、同年一月十九日慶應病院に入院さる。心臟喘息との診斷の下に絕對安靜、各種の强心劑の注射施行等により只管恢復につとめられたるも、尙且つ同年三月二日と同月二十五日に小發作あり、同年四月七日輕快退院さる。後同月中は自宅にて靜養され、五月より出校さる。爾後六、七、八月と炎暑の間發作もなく、元氣もよろしき樣に拜されたるも九月に入りその九日に又々發作あり、十月にも二十日に起りたるも特に休まるゝことなし。然るに十一月十七日に又々發作ありたる爲大森教授の診察を請はれ、その結果暫く自宅にて靜養されることに決す。同月二十一日午後八時頃呼吸困難あり、幾分氣色も勝れられず、引續き就床さる。同二十八日午後主治醫の來訪せる折には談笑をも交はされたるに翌二十九日午前十時二十分マッサージ受療中、輕微なる咳嗽發作と共に遂に永眠さる。

日本醫史學會機關雜誌所載

藤浪博士論著及び史苑

小村英菴（昭和五年二月發行、第一一五六號）
風呂屋と湯屋（昭和六年二月發行、第一一六八號）
日本溫泉學の發達（昭和七年五—七月發行、第一一八三—一一八五號）
江戸幕府醫官多紀家の墓碑（昭和八年六月發行、第一一九六號）
奈須恒德の墓（昭和八年九月發行、第一一九九號）
假遣泉（昭和八年十月發行、第一二〇〇號）
栗本瑞仙院の事蹟と其墓所（昭和十年十一月發行、第一二二五號）
宇田川榕庵（昭和十一年四月發行、第一二三〇號）
京都大德寺塔中眞珠庵所藏の半井家畫像（昭和十二年三月發行、第一二四一號）
乾々齋文庫架藏醫書目錄（昭和十二年五月—十三年四月發行、第一二四三—一二五四號）
橘南谿先生（昭和十三年十月發行、第一二六〇號）
江戸時代の解剖（昭和十四年五月發行、第一二六七號）
管中窺豹（昭和十四年六—十月發行、第一二六八—一二七二號）
江戸時代の解剖の仕方に就て（昭和十四年九月發行、第一二七一號）
東京芝上行寺内に於ける桂川家一門の墓碑（昭和十四年十一月發行、第一二七三號）
繪巻物所載の病に關する醫史學的考察（昭和十五年一—二月發行、第一二七五—六號）
江戸蘭學時代に飜譯或は引用せられし外醫の姓名（昭和十五年六月發行、第一二八〇號）
宇田川榕庵傳補遺（昭和十五年九月發行、第一二八三號）
醫家先哲墓田錄（昭和十五年十一月發行、第一二八五號）
服部南庵の傳（昭和十五年十二月發行、第一二八六號）
幕府江戸醫學館の一補遺に就て（昭和十六年二月發行、第一二八八號）
德川幕府醫師御目見の儀式（昭和十六年三月發行、第一二八九號）
德川幕府醫官家督と任官（昭和十六年七月發行、第一二九三號）
德川幕府醫官の知行高（昭和十六年九月發行、第一二九五號）
德川幕府醫官の贅詞（昭和十六年十二月發行、第一二九八號）
江戸幕府醫官制度（昭和十七年二月發行、第一三〇〇號）
江戸幕府醫官の序列（昭和十七年四月發行、第一三〇二號）
杏林慶弔帳（昭和十七年六—十二月發行、第一三〇四—一三一〇號）
解剖學の發達（昭和十七年十月發行、第一三〇八號）